

二〇一六年度台湾日本語文学国際学術研討会「日本語文学研究と社会との連動」

大場, 健司
九州大学大学院地球社会統合科学府 : 博士後期課程三年

<https://doi.org/10.15017/1903752>

出版情報 : 九大日文. 29, pp.134-138, 2017-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

◎イベント・レビュー

二〇一六年度台湾日本語文学国際学術研討会「日本語文学研究と社会との連動」

大場 健司

筆者は、二〇一六年九月から二〇一七年一月まで台湾の国立台湾大学大学院に留学していた。留学中は台湾で開催される学会に積極的に参加するようにしていた。その一環で、二〇一六年一月一七日に輔仁大学で開催された二〇一六年度台湾日本語文学国際学術研討会「日本語文学研究と社会との連動」に参加した。学会では三つの基調講演の後、四会場に分かれて研究発表が行われた。第一会場では日本近現代文学、第二会場では俳諧や日本思想史、サブカルチャー、第三会場では日本語教育学、第四会場では日本語学に関する発表が行われた。また、会場では日本語学に関するポスター発表も行われていた。筆者は主に第一会場で日本近現代文学に関する発表を聴講した。それぞれの研究発表の内容については、国際学会プロシーディングである台湾日本語文学会編『2016年度台湾日本語文学国際学術研討会「日本語文学研究と社会との連動」論文予稿集』（致良出版社、二〇一六年二月）に口頭発表用の論文が収録されている。

今回の学会のテーマが「日本語文学研究と社会との連動」で

あるように、「文学」と「社会」の問題は不可分である。日比嘉高氏（名古屋大学准教授）による基調講演「グローバル化の中の日本文化研究を考える」で扱われていたのもまた、「大学」と「社会」の問題である。この講演では、日比氏が『いま、大学で何が起きているのか』（ひつじ書房、二〇一五年六月）で問題提起を行った、日本の大学における文系学部廃止の問題が論じられていた。この問題の背景にあるのは、①新自由主義による「グローバル化」(globalization)と②日本政府の「自国愛的なイデオロギー」である。このように、「文学」と「社会」の関係を扱う際に、資本主義 (capitalism) とナショナリズム (nationalism) の問題は避けて通ることができない。

この状況は台湾においても同様らしく、司会の落合由治氏（淡江大学教授）によれば、台湾の大学でも統廃合や教員の削減が問題になっていくという。それでは、台湾の学生が日本語学科で学ぶ意義はどこにあるのだろうか。この問いに対して、日比氏はマイケル・ポランニー (Polanyi Mihaly, 1891-1976) の「暗黙知の次元」(The Tacit Dimension, 1966) における「暗黙知」(tacit knowing) に注目し、単に日本語を勉強するだけでは身につかない知識の習得に、日本語学科の意義を見いだしている。

この「暗黙知」は、文学研究の分野では「コンテキスト」(context) という言葉に言い換えられるだろう。われわれが海外文学を読む際に直面するのは、その「テキスト」(text) の背景にある「コンテキスト」が不明瞭であることである。日本の研究者が比較文学や英文学を研究したり、あるいは台湾の研究者が日本近現

代文学を研究したりする際に直面するのは、そのような「コンテキスト」の問題である。筆者が台湾留学中に実感したのは、台湾の日本近現代文学専攻の大学院生たちが同時代の資料（コンテキスト）をあまり調査せず、主に先行研究ばかり引用していることであつた。ここで重要になってくるのは、同時代言説を調査する方法を身につけることであるし、あるいは旧植民地時代の日本語文学のコンテキストなどにも目を向けることで、文学研究の視野を広げることだろう。

このようにコンテキストを学ぶことが文学研究において重要であるとするならば、大学教育ではどのような授業を行えばよいのだろうか。今回の研究会では、その答えが「サブカルチャー」(subculture) や「メディア」(media) に見いだされていたと言つてもよい。関内勳氏（韓国大田大学校教授）の発表「韓国における日本古典と現代メディア——古典教育を中心に——」や沈美雪氏（中国文化大学副教授）の発表「台湾の大学教育における日本サブカルチャーの講義および研究——社会との連携を考えたつ——」によれば、韓国や台湾の大学においてアニメやマンガが教材となっているという。つまり、サブカルチャーが、学生が日本の文学や文化に興味を持つきっかけになっているわけだ。また、活字メディアに限定され得ないサブカルチャーを学ぶことは、テキストと同時代言説のネットワークの関係を考察する上でも重要である。このように、日本の文化が海外で重要視されていることから、日本の文部科学省が大学の文系学部を縮小して、英語中心の「グローバル化」を行っていること

愚かさが分かる。また、研究会では、サブカルチャー関連で落合由治氏の発表「表現史から見た日本語文章表現の発達——ライトノベルを中心に——」が行われ、ライトノベルにおける挿絵の問題などが扱われていた。

ところで、「台湾」で「日本近現代文学」を読むという行為もまた、テキストを新たなコンテキストへと散種 (Dissemination) することで、新たな読みの可能性や新たな研究方法を提示することになるのではないだろうか。坂元さおり氏（輔仁大学副教授）の発表「船戸与一論——ハードボイルド・ミステリーが描く〈台湾〉——」で行われたのは、日本のハードボイルド作家、船戸与一（一九四一—二〇一五年）による台湾を舞台にした一連の小説を読んでいくことで、「東アジア」の「歴史」や「記憶」をナシヨナリズムに陥ることなく論じていくことであつた。一般に、ハードボイルド (Hardboiled) など大衆作家によるミステリー小説は、純文学のキャノンの作家と比較すると、大学内の研究では扱われることが少ないかもしれない。しかし、カルチュラル・スタディーズ (Cultural studies) の登場もあり、ライトノベルやミステリー小説も論じられるようになってきた。坂元氏の発表は、現在のナシヨナリズムをめぐる言説に対する批判にもなっており、「台湾」や「東アジア」という新しい視点から大衆小説を論じているのではないだろうか。

このように、台湾においても日本近現代文学は盛んに研究されているのであり、今回の研究会は「大学」と「社会」あるいは「グローバル化」を考える上で示唆に富んでいるものであつ

た。新自由主義による「グローバル化」に抵抗するには、オルタナティブなもう一つの「グローバル」(Global)な方法が採られなければならない。それは「国際的」や「インターナショナル」(International)といった言葉がもともと新自由主義ではなく左翼の言葉であったように、本来の意味での「国際的」な視野が必要だということだ。日本の大学では、新自由主義やナシヨナリズムのために、文系学部に対して圧力が加えられているが、今回の研究会をおして、そのような圧力が全くもって不必要であることが分かる。日本に必要なのは新自由主義的な「グローバル化」とは異なった「国際化」である。

台湾日本語学会では、奇数月に例会が開催されており、筆者も三月に研究発表を行うことになっている。入会案内や研究発表、学会誌『台湾日本語文学報』については、学会ホームページ (<http://taiwanicdo.org.tw/>) に詳細が記されているので、日本の大学院生たちが台湾日本語学会で積極的な活動を行い、新たな知見を吸収することを望む。

最後に、今回の学会の詳細を列記しておく。

■二〇一六年度台湾日本語文学国際學術研討会「日本語文学研究と社会との連携」

○場所 台湾・輔仁大学国璽楼二階国際会議ホール

○日時 二〇一六年二月十七日(土曜日)

○主催 台湾日本語学会、

輔仁大学外国語学部、輔仁大学日本語文学科

○共催 科技部、教育部、輔仁大学研究發展処、独立行政法人国際交流基金、韓国日本語学会、日本比較文化学会、致良出版社、大新書局、尚昂文化事業國際有限公司

○後援 公益財団法人交流協会

【開会式】

○頼振南(台湾日本語学会理事長、輔仁大学外国語学部長)

○浜田隆(公益財団法人交流協会台北事務所総務部長)

○奥村訓代(日本比較文化学会会長、高知大学教授)

【基調講演①】(司会 黄翠娥(輔仁大学教授))

○佐倉由泰(東北大学教授)「リテラシー史研究の意義と可能性」

【基調講演②】(司会 頼錦雀(台湾日語教育学会理事長、東呉大学教授))

○西郡仁朗(首都大学東京教授)「東京の言語景観と留学生から見た多言語対応状況——2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて——」

【基調講演③】(司会 落合由治(淡江大学教授))

○日比嘉高(名古屋大学准教授)「グローバル化の中の日本文化研究を考える」

【第一会場】

■座長 林雪星(東呉大学教授)

①王憶雲(淡江大学助理教授)「問題文芸」と早稲田派——大正期の自然主義への視点」

② 曾秋桂（淡江大学教授）「エコクリティシズムから読む有古佐和子『複合汚染』」

■座長 楊錦昌（輔仁大学副教授）

③ 関丙勳（韓国大田大学教授）「韓国における日本古典と現代メディア——古典教育を中心に——」

④ 戸田一康（真理大学副教授）「水上瀧太郎の『山の手の子』——移動する〈私〉——」

■座長 范淑文（国立台湾大学教授）

⑤ 坂元さおり（輔仁大学副教授）「船戸与一論——ハードボイルド・ミステリーが描く〈台湾〉——」

⑥ 落合由治（淡江大学教授）「表現史から見た日本語文章表現の発達——ライトノベルを中心に——」

【第二会場】

■座長 齋藤正志（中国文化大学副教授）

① 黄佳慧（文藻外語大学助理教授）「近世初期における詩題俳諧の発端——『みなし栗』から『あら野』へ——」

② 趙宣映（韓国培材大学校副教授）「日本語教育における川柳の活用に関する一考察」

■陳艶紅（中央警察大学教授）

③ 簡曉花（中華大学教授）『現代大家武士道叢論』における佐藤対浮田論争に関する一考察

■董荘敬（文藻外語大学副教授）

④ 荒木晴香（世新大学助理教授）「台湾の自然・文化遺産に関する

観光人類学的研究——日本の世界遺産研究からその展望を探る——」

⑤ 沈美雪（中国文化大学副教授）「台湾の大学教育における日本サバカルチャーの講義および研究——社会との連携を考えつつ——」

【第三会場】

■座長 羅曉勤（銘伝大学副教授）

① 山下明昭（香川大学教授）「複合辞「と」なる」の習得支援——認知言語学からのアプローチ——」

② 早矢仕智子（韓国大新大学校助教授）「日本人大学生との交流学習実践——韓国人学習者のアンケート調査の分析を中心に——」

■座長 陳淑娟（東吳大学教授）

③ 魏志珍（中華大学助理教授）「外来語の学習と指導に対する日本語教師のピリーフ——台湾の大学日本語教師を対象に——」

④ 奥村訓代（高知大学教授）「日本語教育の底辺を広げる一方法の模索」

■座長 富田哲（淡江大学副教授）

⑤ 伊藤龍平（南台科技大學助理教授）「日本統治下台湾の昔話集編纂事業——国語教育から郷土教育へ——」

⑥ 山田実樹（世新大学助理教授）「日本統治期台湾の初等国語教科書における一人称代名詞——第1・3・5期を対象として——」

【第四会場】

■座長 林慧君（台湾大学教授）

① 譙燕（北京外国語大学教授）「現代中国語における日本語借用語の受容状況と借用形式について」

② 施建軍（北京外国語大学教授）「中日同形語辞書における中日間意味用法相違の描写について」

■座長 王世和（東呉大学教授）

③ 小針浩樹（輔仁大学助理教授）「コンピュータ文と助詞「こそ」の関係」

④ 王怡人（東海大学助理教授）「学習者の目線から見たスキル向上を目標としないコミュニケーション授業——PAC分析による聞き取り調査から」

■座長 黄英哲（台中科技大学副教授）

⑤ 東寺祐亮（九州大学専門研究員、張晨迪（九州大学博士後期課程）「日本語と中国語の比較相関的解釈の成立条件」

⑥ 呉秦芳（真理大学副教授）「日本人母語話者の談話標識——「みたいな」の一考察——意味論、統語論、語用論、ポライトネスの観点から——」

【パネルディスカッション「日本語文学研究と社会との連携」】

■モデレーター 頼振南（台湾日本語文学会理事長、輔仁大学外国語学部長）

① 佐倉由泰（東北大学教授）

② 西郡仁朗（首都大学東京教授）

③ 日比嘉高（名古屋大学准教授）

④ 早矢仕智子（韓国日本語学会副会長、韓国大真大学校助教）

⑤ 関丙勳（韓国大田大学教授）

⑥ 八尋春海（日本比較文化学会九州支部長、西南女学院大学教授）

【ポスター発表】

① 林淑璋（元智大学助理教授、薛芸如（元智大学助理教授）「台湾人初級日本語学習者向けの多読授業における指導教員の役割について」

② 黄馨儀（中国文化大学助理教授）「メディア社会論を取り入れた「日語翻訳（日訳中）」教材の応用」

③ 頼衍宏（靜宜大学副教授）「国宝「銅造薬師如来坐像」光背銘続攷」

④ 簡聖雅（輔仁大学修士課程）「日本語における色彩語の研究——翻訳データベースの用例を中心に——」

⑤ 曾章銘（輔仁大学修士課程）「台湾における日本文化の受容に関する考察——日本の顔文字を例に——」

⑥ 楊文艷（輔仁大学修士課程）「前接辞についての研究——「新」と「再」の比較」

【閉会式】

○横路啓子（輔仁大学日本語学系主任）

（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程三年）